monthly eisu 「個」への対応
編集・発行／eisu総本部　〒514-0006 三重県津市広明町337
TEL 059-213-7750　FAX 059-227-6503　WEBサイト http://www.eisu.co.jp
2017.1 Vol.114

今を生きる子供たちに求められる能力は何か?

2020年より実施される新しい大学入試から考える

21世紀型人材とは

20世紀の日本は、マニュアル通りに仕事を効率良くすすめることができる人材を集団的に育成し、工業中心に大量の時間と労力を投入することで経済成長を遂げてきました。しかし21世紀に入り、工業を基幹とする「工業社会」からIT産業を基幹とする「知識基盤型社会」へと移行すると、その方向性は限界に突き当たりました。実際、90年代、国民1人あたりのGDPが世界第3位だった日本は今や26位まで後退し、先進国最低レベルにまで落ち込んでいます。それでもまだ日本は人口の多さを支えに何とか先進国の地位を保持していますが、人口減少、少子高齢化が世界に類を見ないスピードで進むなか、日本の先行きには暗雲が立ち込めていると言わざるをえません。

この状況を何とかしていくためには、「今」の社会にあった能力の育成が急務です。現在の「知識基盤型社会」では、秀でた個の能力を発揮して高い付加価値を創造できる人材―たとえばマニュアルにただ従うだけでなく、それを創ることのできる人材、多様な個性を持つ人々と協働して困難な課題を解決できる人材―が求められています。個性を活かし、自らを高める努力を怠らず、社会貢献を通じて経済的自立を続けることができる人間的実力が国民一人ひとりに求められる、そんな時代がきているのです。

大切なのは二つの能力

こうした人間的実力は、二つの能力から成り立っていると言われています。一つは「認知能力」と呼ばれる、学力テストで計測できる能力です。偏差値などで数値化することができるため、今までの教育での評価は「認知能力」が中心でした。新しい大学入試で求められる学力の三要素のうち、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」の二つの要素がそれにあたります。これからの時代にはさらに高度な「認知能力」が要求されることは言うまでもありません。

しかし社会的成功には「認知能力」に加え、「生き抜く力」と言われるもの、つまりこれまでの学力の尺度では測りにくい「非認知能力」も大きく影響していることが明らかになってきたのです。「生き抜く力」には、志、情熱、忍耐強さ、コミュニケーション能力など、人生の成功に直結するものが含まれ、学力の三要素の最後の「主体性・多様性・協働性」にあたるものを含みます。

これからの教育の使命はこの「二つの能力」に配慮しながら、双方をバランス良く高いレベルにまで育て上げることにあります。今や立場を問わず地域社会全体が協働して、日本の教育を変革し、レベルアップさせていかなければなりません。

受験は絶好の機会

一般的に受験は、志望校に合格するのに必要な学力、つまり認知能力を身につけるためだけの機会と誤解されがちです。しかし、受験はこれまでも、そしてこれからも、非認知能力を育むうえでも絶好の機会だと、私はこれまでの指導経験から確信しています。なぜなら受験は、高い認知能力を身につけていく過程で「生き抜く力」、つまり志を持って主体的に物事に取り組む姿勢、粘り強さ、テスト本番で自分の力を出し切る精神力などの非認知能力も必然的に鍛錬していくものだからです。たとえばスポーツで言われる「心」「技」「体」で言うと、トップアスリートたちは高い目標を達成するために、血のにじむような「体」と「技」の鍛錬を続ける過程で「心」も研鑽しています。受験も同様です。受験を通して頭脳と心を鍛錬して得た人間的実力こそ、まさにこれからの時代に求められる能力なのです。だから、志望校合格に向けて一所懸命努力することは、いつの時代でも価値があるのです。

そして、人間的実力の成長を促す最も効果的な環境は、正の同僚効果（ピア・エフェクト）が発揮される、つまり互いに良い影響を及ぼしあえる、優れた仲間が集まっている中にある、と言われています。

こういう時代だからこそ、人間的実力を育める多彩な機会を創造し、共に切磋琢磨できる優れた環境の中で子供たちを育てることが教育の原点であると、私は確信します。

eisu COO
（最高執行責任者）
伊藤 奈緒（いとう なお）

自身も中1から高3まで6年間学んだeisuに入社。入社3年で人気・実力ともeisuの大学入試部門No.1講師に。その後「東進衛星予備校」の運営に注力し、その成功により日本全国の教育関係者の注目を集め、研修・指導にも腕を揮っている。座右の銘は「情熱が才能!」。